

# エリザベス女王国葬ルートへのまなざし

——都市景観から「伝統の創出」を読む<sup>1</sup>

大 澤 舞

## 1. はじめに

2022年9月8日にイギリスの女王エリザベス2世 (Queen Elizabeth II) が96歳で逝去し、70年にわたる波瀾に満ちた時代に幕がおりた。スコットランドにある王室所有のバルモラル城 (Balmoral Castle) で亡くなった彼女の遺体は、ロンドンのバッキンガム宮殿 (Buckingham Palace) に移された。その後、14日午後5時から19日午前6時半まで、国会議事堂として使われているウエストミンスター宮殿 (Palace of Westminster) 内のウエストミンスター・ホール (Westminster Hall) にて棺が一般人に公開された。弔問の列は15日の時点で7kmにも及んだという (BBC)。そして19日午前11時からウエストミンスター寺院 (Westminster Abbey) で国葬が執り行われた。国葬の行進ルートの沿道には多くの人々が詰めかけ、彼女の棺を見送った。葬儀の様子と、バッキンガム宮殿に向けて行進していく女王の棺と長い葬列は、テレビで中継され、インターネットでも同時配信された。生前の彼女や王室のあり方は幾度も批判にさらされてきたにもかかわらず、世界中の人々が彼女の死を悼んだのである。

王室の儀式を歴史的な文脈から分析した歴史家のデイヴィッド・キャナダイン (David Cannadine) によれば、「イギリス王室の儀式的イメージの発展 (the developmental of the ceremonial image of the British monarchy)」には「4つの明確な段階 (four distinct phrases)」があるという (Cannadine 107)。第一段階は「1820年代以前から1870年代」で、この時代はまだ「田舎的 (provincial)」で、「前産業的社会 (pre-industrial society)」であったため、儀式が「うまく管理されていなかった (ineptly managed)」という (Cannadine 108)。第二段階は、ヴィクトリア女王がインド皇帝となった1877年

から第一次世界大戦開始の1914年までの期間であり、「創り出された伝統の最盛期 (the heyday of 'invented tradition')」としている (Cannadine 108)。第三段階は、1918年からエリザベス女王の戴冠式があった1953年である。そして第四段階は1953年以降であり、キャナダインは1977年のシルヴァー・ジュビリーまでをひとつの区切りとしている。

「創り出された伝統」とは、はるか昔から続いていると思われる「伝統」が、「実際には創り出され、構築され、形式的に制度化され (actually invented, constructed and formally instituted)」て「急速に確立 (establishing themselves with great rapidity)」したものであることだと、歴史家のエリック・ホブズボウム (Eric Hobsbawm) は定義づけている (Hobsbawm 1)。

It [the term 'invented tradition'] includes both 'traditions' actually invented, constructed and formally instituted and those emerging in a less easily traceable manner within a brief and dateable — period a matter of a few years perhaps — and establishing themselves with great rapidity. (Hobsbawm 1, 下線は引用者)

その特殊性は、「歴史的な過去との連続性がほとんど人為的な (the continuity with it [a historic past] is largely factitious)」ことである (Hobsbawm 2)。そもそも“invent”には、“create or design”の意味のみならず、“make up (an idea, name, story, etc.), especially so as to deceive someone”という意味もある。過去から脈々と受け継がれてきたと思われる伝統の「連続性」は幻想であり、“invent”の後者のニュアンスを踏まえるならば、近代国民国家の形成を目的とした「捏造」によって生み出されていることになる (Hobsbawm 13-14)。そのように考えると、2022年のエリザベス女王の国葬ルートは、彼女とそれ以前の王室の歴史の「連続性」を「捏造」するためにデザインされていた、ととらえることが可能かもしれない。

そのように意図的に「創出」された「伝統」を伝える手段として、メディアが重要な機能を果たしてきた。キャナダインは、上記のように段階分けした上で、王室による公式行事の様子を民衆に届けるメディアの役

割<sup>2</sup>についても論じている。彼はメディアを通じた王室行事の発信は第二段階の時代が始まりであると指摘する。1880年代以降のメディアの著しい発展にともない、事実報道よりも低俗な内容を扱う労働者階級向けの「イエロー・プレス (the yellow press)」の出現によって、「ニュースはますます全国化して煽情的に (news became increasingly nationalized and sensationalized)」なった (Cannadine 122-23)。新聞は王室の壮麗な儀式を大々的に報じ、それゆえに王室は「神聖視されるオリムポス (venerated Olympus)」 (Cannadine 123) のような存在になりえたのである。そして第四段階ではテレビメディアが発達し、エリザベス女王の戴冠式や1977年のシルヴァー・ジュビリーが実況放送された。荘厳な儀礼は、国際社会の混乱における国家の「安定性 (stability)」を国民に印象づけただけでなく、その儀式への国民の「積極的参加 (active participation)」も可能にしたのである (Cannadine 157-58)。イギリス王室によるメディアの戦略的利用は、「帝国」としてのイギリスの国威を国民や世界中の人々に視覚的に見せつけ、伝統を「創出」する効果を生み出してきた。

第四段階と2022年の彼女の国葬の類似点は映像配信であるが、国葬はテレビのみならずインターネットという新たなテクノロジーに媒介されて全世界に中継／同時配信で伝播された。さらにYouTubeの普及によって、個人が第四段階の時代よりも手軽に、しかもメディア各社が映したさまざまな角度から、その儀式を繰り返し追体験できるようにさえなったのである。メディアを通じて画面上に映し出された彼女の国葬の行進のシーケンスはロンドン中心部の都市空間を物語化し、イギリスの歴史を表象していた。本稿では、キャナダインの提示する第二段階と第四段階を踏まえて、パジェントのように物語化された行進の軌道を具体的にたどりながら、エリザベス女王の国葬が紡いだ「伝統の創出」の連続性を考察していく。

## 2. ホワイトホールが映し出す歴史の層

国葬の行進のルート全体 (図版1)を確認すると、まずはウェストミンスター寺院で葬儀を執り行い、そこを出たあと、葬列はウェストミンスター宮殿の横を通って、ホワイトホール (Whitehall) という通りに入っていく。ホ

ホワイトホールの途中で葬列は曲がり、ホース・ガーズ (Horse Guards) の門をくぐって、ザ・マル (the Mall) という通りを進んでいく。さらにバッキンガム宮殿 (Buckingham Palace) の前を過ぎ、最後は公園のなかを歩いてウェリントン・アーチに到着した。そこで女王の棺は車に乗せられて、埋葬の



図版1 国葬の行進ルート

ためにロンドン郊外にあるウィンザー城 (Windsor Castle) へと向かった。このルートのなかで本稿がとくに注目するのは、ホワイトホールとザ・マルと呼ばれるふたつの通りである。

まずはじめに、国葬ルートの最初の地点であるウェストミンスター寺院と、ウェストミンスター宮殿について確認しておきたい。国葬が執り行われたウェストミンスター寺院は、11世紀に創建されたイギリスの代表的な中世ゴシック建築のひとつである。13世紀から18世紀までの多くのイングランド王がここに埋葬されている。王室の様々な公式行事の舞台となり、とくにほとんどの「歴代のイングランド国王の戴冠式が挙行」(中村151)されてきたことで有名である。エリザベス女王の戴冠式のみならず、エディンバラ公爵フィリップ王配との結婚式もここで行われた。ウェストミンスター寺院とセント・ポール大聖堂 (St Paul's Cathedral) を「イギリスの二つのパンテオン」として論じる中村武司は、歴代の戴冠式の舞台となってきたこの寺院について、「国王の権威や支配の正当性を確認するための空間」(151)であると同時に、「イギリスの伝統や歴史の優越を他のヨーロッパ諸国に誇示するための空間」(161)でもあると分析している。そのような空間においてエリザベス女王の葬儀が執り行われ、かつその様子を世界中に同時配信したのは、まさに彼女ひいては王室の「権威」と「優越」をイギリス国内やヨーロッパのみならず、世界中に改めて知らしめる効果があったと言えるだろう。

続いて、ウェストミンスター寺院を出た女王の棺と葬列は、有名な時計台のビッグ・ベン（Big Ben）を右手に見ながら、ホワイトホールへと行進していく。ビッグ・ベンがある建物の名前はウェストミンスター宮殿といい、その中に国会議事堂がある。そこは11世紀半ばから16世紀初頭まで、英国王室の公式の居住地としての宮殿であった。当時の建物は1834年に火災で大半が焼失した。画家のウィリアム・ターナー（William Turner）は、この火事を聞きつけて駆けつけ、テムズ河の「兩岸を駆けまわって燃える国会を描きつづけ」たとされる（鈴木『ジェントルマンの文化』29）。そうして出来上がったのが《国会議事堂の火災、1834年10月16日》（*The Burning of the Houses of Lords and Commons, 16th October, 1834*）という絵画である。現在の建物はその2年後のコンペティションで採用されたチャールズ・バリー（Charles Barry）によるデザイン<sup>3</sup>で、19世紀のゴシック・リヴァイバル（ネオ・ゴシック）様式を採用して、1840年から再建された。ただし建物全体としては、テムズ河対岸から見るとよくわかるように、ゴシックと古典主義との折衷様式になっている。近代化に加えて、こうした「折衷化と多様化を経ていくのがヴィクトリア朝ゴシックの特徴」（大石31）とされている。

このあと、行進はホワイトホールに入っていく。「ホワイトホール」とは、通りの名前でもこの地区の名称でもあるが、もともところにはホワイトホール宮殿（Palace of Whitehall）があったために、そのように呼ばれている。1530年代初頭に当時のイングランド王ヘンリー8世（Henry VIII）は、ウェストミンスター宮殿の次の宮殿として、ホワイトホールに移り住んだ。しかし宮殿は1690年代の火災でほぼすべて焼失することになる。唯一残っている建物は、17世紀初頭ルネサンス様式のバンケティング・ハウス（Banqueting House）である。1619年に建築家イニゴ・ジョーンズ（Inigo Jones）が設計し、1622年に完成している。歴史家の見市雅俊によれば、バンケティング・ハウスは「スチュアート朝宮廷文化の華である仮面舞踏会の舞台」でもあったという（見市80-81）。この館はイギリスの歴史上、とても有名な場所である。というのも、17世紀半ばに国王と議会派が対立した内戦、すなわち清教徒革命が起きるが、1649年に当時の国王チャー

ルズ 1 世 (King Charles I) は、王室の晩餐会などが開かれていたこの建物の前で、議会派の手によって公開処刑されたからである (見市 81)。図版 2 はその処刑の様子を描いており、バンケティング・ハウスを背景にして、中央部分で処刑人がチャールズ 1 世の落とされた首を見物人に見せている。



図版 2 チャールズ 1 世の公開処刑

ホワイトホール宮殿は 1698 年に火事によって焼失している。その後、焼け落ちた部分は「財政難を理由に」(見市 82) 再建されることはなかった。「焼け残った部分は政府官庁の建物として再利用」(見市 82) されており、ホワイトホールは現在、かつての宮殿の跡地に多くのイギリス政府関連の建物が並ぶ官庁街となっている。行政機関の施設が新古典主義様式を中心として現在のように整備されていったのは、19 世紀末以降のことである。ただし、本稿が着目したいのはそうした建物ではなく、ホワイトホールの通りにある 20 世紀のふたつの記念碑、すなわち第一次世界大戦と第二次世界大戦の慰霊碑である。

まずは第一次世界大戦の慰霊碑「セノタフ (the Cenotaph)」について確認する。そもそも一般名詞としての“cenotaph”という単語の意味は、戦没者の記念碑・慰霊碑であるが、定冠詞“the”をつけた固有名詞の“the Cenotaph”は、ホワイトホールにあるこの慰霊碑を指す。設計担当は建築家エドウィン・ラッチェンス (Edwin Lutyens) で、彼の 133 以上ある戦争記念物のなかで最初に手がけたのがこの慰霊碑であった (図版 3)。1919 年当時の首相ロイド・ジョージ (Lloyd George) は、ラッチェンスを英国首相官邸のあるダウニング街 10 番地に呼び、「ロンドンでの勝利パレードに向けた棺台 (a catafalque) のデザインを正式に依頼」したという (Greenberg 7)。ジョージは設計のイメージとして、「特定の宗派にとらわれない性格

(nondenominational in character)」の「空の墓 (an empty tomb)」を求めた (Greenberg 7-8)。それゆえに、セノタフは宗教性を一切排除した「もっとも控えめ (modest)」なモダンデザインとなっており、大戦で亡くなったイギリスとコモンウェルス諸国の多くの兵士たちを偲んでいる (Greenberg 5)。除幕式は終戦の翌年、1919



図版3 第一次世界大戦の慰霊碑「セノタフ」

年の7月18日である。毎年、第一次世界大戦の休戦記念日の11月11日に一番近い日曜日に、王室関係者たちを中心として追悼礼拝が行なわれており、これを「追悼の日曜日 (Remembrance Sunday)」と呼ぶ。この慰霊碑の横を葬列が通り過ぎていった時、多くのイギリス国民は、生前の女王がここで慰霊する姿を思い出したであろうことは想像に難くない。

「セノタフ」のすぐ先に、もうひとつの慰霊碑、「第二次世界大戦の女性たちのメモリアル (The Monument to the Women of World War II)」がある。エリザベス女王が2005年7月9日に除幕した。西洋史におけるジェンダー問題を専門とする林田敏子によれば、この大戦において、イギリスは「参戦国中、女性に徴兵法を適用した唯一の国」であった (林田4)。女性部隊への総動員数は「約60万人」にもものぼり、その役割は掃除や調理などの「ドメスティック・ワーク」から、電話交換手や電信技士、機密事項の暗号解読といった幅広い任務にわたった (林田8)。1941年4月には女性が防空部隊に所属することが認められるようになり、彼女たちは敵機への「迎撃」という「軍事作戦の中に組み込まれ」た (林田8)。戦後、男性兵士を追悼する記念碑は数多く建てられたものの、彼らと同じように戦った女性たちへの記念碑は1990年代まで存在しなかったという (林田16)。「あらゆる女性」を顕彰するために、「特定の職業や組織、個人に優位性を付与しない」ことを前提として、「戦時のさまざまな職業や活動を特徴づける衣服や帽子を記念碑の周囲に配する」こととなった (林田19)<sup>4</sup>。

そのため碑の側面には、女性たちが着用していた看護服／警察・軍関連の制服／溶接マスクなど、17着分が彫られている。「セノタフ」同様に、女王の葬列はこのモニュメントの横も通過していった。

このようにホワイトホールには、大きく分けて3つの歴史の層を読むことができる。まずは、16世紀から17世紀の宮殿、その唯一の痕跡としてのバンケティングハウス。そして宮殿の跡地に19世紀末から整備された現在の官庁街。さらには、通りに建てられた20世紀前半の2つの世界大戦の慰霊碑。かつて宮殿だったホワイトホール地区は、現在に至る過去百数十年間の官庁街であるだけでなく、ふたつのモニュメントが象徴する第一次・第二次世界大戦とその犠牲者を慰霊する「20世紀のイギリスの記憶」が埋め込まれているのである。

### 3. ザ・マルと19世紀の大英帝国の記憶

行進の列は、ホワイトホールから離れて、バッキンガム宮殿へと伸びる大通り、ザ・マルに向かうために、ホース・ガーズ・ビルディング（Horse Guards Building）の門を通り抜けていく。18世紀半ばに、建築家であり造園家でもあるウィリアム・ケント（William Kent）が設計を担当し、パツラーディオ様式となっている。もともとは、ホワイトホール宮殿の衛兵詰所（guard house）であった。1698年に宮殿が焼け落ちた後、1872年までは陸軍参謀本部として、その後1904年までは陸軍最高司令官の司令部として使われた。バンケティング・ハウス側の入り口では、乗馬した騎兵の交代する様子を見られるため、観光名所となっている。また、ホース・ガーズの門を抜けた後の広場は、ホース・ガーズ・パレード（Horse Guards Parade）と呼ばれ、軍事関連の儀式の際に使用されており、こちら側も観光スポットとして人気である。広場正面には「ガーズ・メモリアル（Guards Memorial）と呼ばれる慰霊碑があり、第一次・第二次世界大戦や1918年以降のその他の紛争における軍の戦没者たちを顕彰している。リバプール出身の建築家ハロルド・チャルトン・ブラッドショウ（Harold Chalton Bradshaw）による設計で、ギルバート・レッドワード（Gilbert Ledward）による5人の近衛兵のブロンズ彫刻がある（図版4）。その彫像



の上には小説家ラドヤード・キプリング (Rudyard Kipling) が書いた碑文も彫られている。

ここから大通りのザ・マルと19世紀ヴィクトリア朝との関連を見ていこう。行進の列は、900メートルにおよぶ直線道路のザ・マルを通過して、エリザベス女王のロンドンでの居住地であったバッキンガム



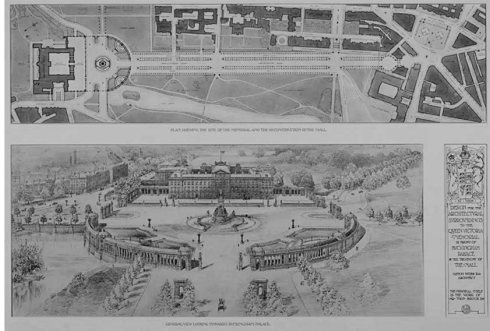
図版4 ガーズ・メモリアル

ム宮殿へと向かう。ロンドンでは珍しい、見晴らしが効くこの通りは、たびたび国家行事の場になり、国賓を宮殿に招くときに通る道である。ただし、現在のような姿に整備されたのは、20世紀以降のことである。

1837年にヴィクトリア女王 (Queen Victoria) が即位した際、彼女はバッキンガム宮殿を王室の正式な居住地とした。その後の63年間のヴィクトリア朝は、イギリスが大英帝国として、世界の中心に君臨した黄金期にあたる。その象徴である女王は、1901年1月に、20世紀の始まりとともに亡くなる。その死を悼んで、バッキンガム宮殿の正面から伸びるザ・マルに、女王の記念碑を作る計画が立ち上がった。また、それに合わせて、20世紀ロンドンの都市改造計画の一部として、大規模なパレードも可能なように、ザ・マルの道幅を広げ、宮殿前の広場も整備することになる。20世紀に入っても大英帝国の中心としての威厳が示せるようにと、ヨーロッパ大陸の大都市にある大通り、たとえばパリのシャンゼリゼ通りにも見劣りしない空間に作り替えようとしたのである (Smith 30)<sup>5</sup>。そして1901年の末には、建築家アストン・ウェップ (Aston Webb) による計画案 (図版5) が採用された。図版5の上部の図は、バッキンガム宮殿 (左) とトラファルガー広場 (右) を結ぶザ・マルを再整備するための設計図である。下部はザ・マルからバッキンガム宮殿の眺めをデザインした図となっている。

宮殿前広場の「ヴィクトリア女王の記念碑 (Victoria Memorial)」は、

1911年に除幕された。碑の東西南北に、4人の女性たちの像がある。ザ・マルの正面にあたる東側にあるのがヴィクトリア女王で、手には権威の象徴である王笏と宝珠を持っている。ほかの三面には「慈愛」、「真理」、「正義」を象徴する女性たちの像があり、記念碑の頂



図版5 ウェップによるザ・マルの設計図

には金色の勝利の女神像が置かれている。「太陽の沈まぬ国」としての大英帝国の黄金期を築いた彼女の死は、「王室アイコンの喪失 (the loss of a royal icon)」（Smith 21）であると英国人たちに嘆かれた。この記念碑の建立は、そうした国民の「喪失感」を埋めると同時に、この建立の計画委員会にとっては「新たな帝国空間の創造 (the creation of a new imperial space)」という狙いでもあった (Smith 21)。そもそもロンドンの建造環境は「帝国都市 (an imperial city)」（Smith 21）としては不十分であったため、このヴィクトリア女王記念碑の建設の際に、目の前のザ・マルは「都市改造計画によって拡張」されることとなった (井野瀬『『ダロウエイ夫人』と帝都』50)。

一方、バッキンガム宮殿と向かい合うザ・マルの入口側には、パリの凱旋門風のアドミラルティ・アーチ (Admiralty Arch) が造られた。このアーチもウェップが設計し、新古典主義様式で1912年に完成した。“Admiralty”の意味は「海軍本部」であり、この門の名称は隣接する海軍本部に由来している。ヴィクトリア女王の息子エドワード7世 (Edward VII) が、亡き女王を讃えるために建造を命じたものである。アドミラルティ・アーチの向こうには、有名なトラファルガー広場 (Trafalgar Square) がある。そこは1805年にイギリス海軍が、スペインのトラファルガー岬でフランスのナポレオン・ボナパルト (Napoléon Bonaparte) を打ち破り、「大英帝国の海上覇権を確保することになった」勝利を記念して (井野瀬『『ダロウエ

イ夫人』と帝都」53), 1820年代にジョージ4世(King George IV)が依頼した建築家・都市計画家のジョン・ナッシュ(John Nash)によって作られたものである。広場にはトラファルガーの戦いを指揮したホレイショウ・ネルソン提督(Admiral Horatio Nelson)の記念柱も設置されている。さらには、世界中の美術品を収蔵しているナショナル・ギャラリー(National Gallery)<sup>6</sup>も1824年に建設された。以上のように、20世紀初頭のザ・マルの再整備——ヴィクトリア女王の記念碑, アドミラルティ・アーチ, トラファルガー広場, ナショナル・ギャラリーを結ぶパレード用の道路の建設——は、19世紀ヴィクトリア朝の栄光の記憶を空間に刻印する都市改造計画だったのである<sup>7</sup>。

葬列は、バッキンガム宮殿の前を通り過ぎる。もともとはバッキンガム・ハウス(Buckingham House)と呼ばれた煉瓦造りの質素なルネサンス様式であったが、ジョージ4世が建築家ジョン・ナッシュ(John Nash)の提言を受けて、1825年から全面改装に着手し、12年かけて現在の新古典様式で完成した。1837年にヴィクトリア女王が即位した際に、それまでの居住場所であったシティ・オブ・ウェストミンスター(City of Westminster)にあるセント・ジェームズ宮殿(St. James's Palace)から、バッキンガム宮殿に移り住み、現在も王室の公式居住地となっている。1913年には宮殿の正面(facade)が改築された。その際に国王ジョージ5世(King George V)がその新たな正面部分について、「中央のバルコニーを一般に開かれたままにしておくべきである(the new facade of should leave the central balcony open to public view.)」と主張した(Smith 36)。改築の2年前の1911年の戴冠時、彼自身はこのバルコニーから民衆に手を振っており(Smith 36)、その形を後世に残そうとしたのである。現在でも公式行事や祝賀行事の際に、王室のメンバーがこのバルコニーから国民に姿を見させている。また、赤い制服に黒い帽子をかぶった衛兵の交代儀式が見られることで有名な観光地となっている。

バッキンガム宮殿を過ぎて、グリーンパーク(Green Park)を抜けた行進のゴールは、ウェリントン・アーチ(Wellington Arch)である。これはイギリスがナポレオン戦争でフランスに勝利したことを祝して、1825年

に計画された。もともとは現在の位置とは異なり、ハイド・パーク・コーナー (Hyde Park Corner) の別の場所に建てられていた。その頃は装飾的な彫刻のないアーチだけで、そこに彫刻家マシュー・コーツ・ワイアット (Matthew Cotes Wyatt) によるウェリントン公爵 (Duke of Wellington) の騎馬像が乗せられた (図版6)。ウェリントン公爵はナポレオン戦争 (スペイン独立戦争やワー



図版6 1870年頃のウェリントン・アーチ

テルローの戦い)で活躍した陸軍軍人であり、首相にもなった人物である。

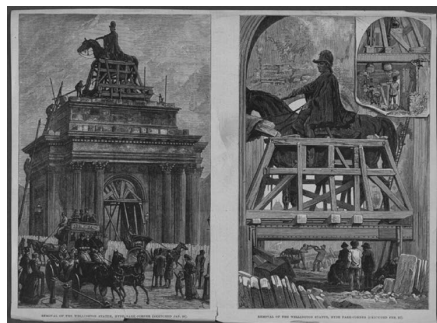
この騎馬像自体は1836年に建設計画が持ち上がり、1846年に完成し、高さ9.1メートル、横7.9メートル、重さ40トンといった、かなり巨大な像となった (Cole 90)。しかしその「過剰な大きさ (its overweening size)」は取り外すべきかどうかの「議論 (controversy)」を巻き起こした (Walsh and Varnava xvi)。「巨大で不格好な像 (an enormous, unwieldy statue)」は「その下にある門と調和がとれていない (completely disproportionate to the arch beneath)」と世間からは不評だったからだ (Walsh and Varnava xvi)。雑誌『パンチ』 (Punch) では、その度を越した大きさは嘲りの対象となり、1846年6月13日の記事に風刺画が掲載されている (図版7)。また、同年11月14日には、週刊誌『スペクテイター』 (The Spectator) の記事「彫像——撤去通知 (The Statue: Notice to Quit)」において、「女王は、ウェリントン像をハイドパークコーナーのアーチの上に残さないことを決定した」と主張されている (The Queen, it is asserted, has



図版7 『パンチ』での風刺画

decided that the Wellington statue shall not remain on the top of the arch at Hyde Park Corner.)」と書かれている。この記事からわかるように、ヴィクトリア女王も世間同様に「巨大で不格好な像」は気に入らなかったようである。

その大きすぎる騎馬像はすぐには撤去されなかったものの、1885年に交通渋滞が理由でウェリントン・アーチをコンスティテューション・ヒル(Constitution Hill)に面した現在の位置に移動させる際に、取り外されることとなった(Brindle, "The Wellington Arch" 79)。図版8は彫像の撤去時の様子である。その騎馬像は現在、イングランド南部に位置する「陸軍の本拠地」として有名なアルダーショット(Aldershot)に移されている。ちなみに、ハイド・パーク・コーナーには、巨大な像の代わりに、1888年に彫刻家ジョセフ・ボーム(Joseph Boehm)による新たに控えめなブロンズ製のウェリントン公爵の像が建てられ、現存している(Brindle, "The Wellington Arch" 80)。



図版8 ウェリントン像の撤去作業

現在ウェリントン・アーチの上に設置されている像は、「クアドリガ(quadriga)」と呼ばれる四頭立ての戦車である。その戦車にはギリシア神話の勝利の女神ニケ(Nike)が乗っており、彼女はローマ神話の勝利の女神ヴィクトリアにあたる。この女神像が「帝国の母」としてのヴィクトリア女王を象徴していることは明白である。19世紀初頭に活躍した軍人ウェリントンの(不評ではあったものの)偉業を讃えた巨像や、ヴィクトリア女王を想起させるクアドリガに乗る女神ニケの像を通して、このアーチは「大英帝国の繁栄のはじまり」を象徴する建造物と言えるだろう。

ここまで見てきた、アドミラルティ・アーチ、ザ・マル、ヴィクトリア女王の記念碑、そしてこのウェリントン・アーチへと続く空間的連続性は、「大英帝国の記憶」としての19世紀初頭から20世紀初頭までの時間的連続性を表している。すなわち、フランスに対する勝利、それに続くヴィク

トリア朝の繁栄，そして20世紀に入ってからの過去の栄光と伝統の記憶化，という時間の流れである。女王の棺はここで車に乗せられて，埋葬場所であるウィンザー城へと向かっていった。

以上本稿では，彼女の国葬ルートと建築物をたどりながら，その都市景観から読み取れるイギリスの歴史を紐解いてきた。本稿の前半で言及したホワイトホールの官庁街と，後半のバッキンガム宮殿に続く大通りザ・マルの整備は，ヴィクトリア女王が統治した19世紀大英帝国の繁栄を土台にして，20世紀イギリスのナショナル・アイデンティティ確立を目指した都市デザインの一部であった。そして今回，20世紀後半に君臨した女王，エリザベス2世の国葬ルートへのまなざしは，こうしたヴィクトリア朝の栄光を媒介とした，歴史の連続性に向けられていたと言えるだろう。エリザベス女王の国葬とは，テレビやインターネットを通して世界に発信した，いわゆる「伝統の創出」としての儀式であった。わたしたちのまなざしは，21世紀初頭のイギリスにおいて，（善かれ悪しかれ）偉大さの記憶とプライドを再創出するための儀式の現場に立ち会っていたのである。そして，おそらくこれからエリザベス女王のモニュメントも建造されると予想されるが，ヴィクトリア女王のそれと比べて，彼女のモニュメントがどのような歴史を表象するのかは楽しみなどころである。

## 注

- 1 本稿は，2022年11月12日（土）に開催された明治大学建築シンポジウム「総合芸術とは何か——場所と意識，そのあいだを往還する芸術へ」で発表した内容を加筆・修正したものである。本シンポジウムは，明治大学大学院の建築・都市学専攻「総合芸術系」の取り組みを，同大学大学院の院生や修了生に向けて発信する機会として催された。当時はコロナ禍であったにもかかわらず，当日は会場に多くの聴講者が訪れ（YouTubeでも同時配信），イギリス・ロシア・アメリカ・ドイツの建築にまつわる各発表に耳を傾けていた。このような貴重な機会を与えてくださった建築・都市学専攻の先生方には，この場を借りて感謝申し上げたい。
- 2 キャナダインは，王室の儀礼（パフォーマンス）の分析において，検討すべき10項目を挙げており，メディアはそのうちのひとつである。その他9項目は，「君主の政治力」，「君主の個人的人格と名声」，「国の経済的・社会的構造の性質」，「テクノロジーとファッションの主な状況」，「国家のセルフ・イメージ」，「首都の状況」，「祈祷式，音楽や組

- 織の責任者の態度」, 「実際に行なわれた儀式的性質」, そして「商業的活用の問題」である (Cannadine 106-07)。これらの多角的な視点から、キャナダインはイギリス王室の「創り出された伝統」について緻密な検証を実行している。
- 3 バリーは、この国会議事堂の設計に際して、ゴシック建築に精通していたオーガスタス・W・N・ピュージン (Augustus W. N. Pugin) に協力を求めた。バリーが「平面計画, 立面計画, 断面計画」を担当し、ピュージンは「細部や内装などの設計」を手がけた (大石 35)。
  - 4 このような記念碑のあり方について、従軍経験のある女性たちは「不満の声」をあげた。なぜなら、あらゆる女性の貢献を讃えることは、「軍の女性部隊の存在が不可視化される」ことにつながりかねないからだという。彼女たちは戦争に従事した女性間で「優劣」をつける意図はないとしつつも、「ホワイトホールという軍事的空間に設置」することの意義を考えるべきであると主張した (林田 21)。
  - 5 キャナダインもこの大通りについて言及しており、1880年代の「国際競争」において、ヨーロッパ各地 (ローマ、ウィーン、ベルリン、パリなど) も、自国の「自信 (self-esteem)」を「もっとも目につきやすい (the most visible)」方法で誇示するために、都市の改造や建築物によって偉大さを国民に対して演出したという (Cannadine 126-27)。
  - 6 かつてのナショナル・ギャラリーとトラファルガー広場はつねに交通渋滞の道路に「遮られていた」が、1990年代の「ミレニアムを記念するロンドン改造事業の一環」で道路をなくし、美術館と広場が「直結するさらに大きな広場」へと造り変えられた (桜井 20)。
  - 7 キャナダインはこれらの一連の建造について、ロンドンを「[チャールズ・] ディケンズが描いた不潔で霧に閉ざされた街 (the squalid, fog-bound city of Dickens)」から「帝国の首都 (an imperial capital)」へと改造するなかで「最も顕著で一貫性のある再建の一部 (the most significant, coherent piece of rebuilding)」としている。なぜなら、これらは「ロンドンに唯一の戦勝祝賀の通りをもたらした壮大で記念碑的な帝国の集合体 (grand, monumental, imperial ensemble, which gave London its only triumphal, ceremonial way)」であるからだと述べている (Cannadine 128)。

## 主要参考文献

- Barker, Felix, and Ralph Hyde. *London: As It Might Have Been*. John Murray, 1982.
- Brindle, Steven. "The Wellington Arch and the Western Entrance to London." *The Georgian Group Journal*, Vol. 11, 2001, pp. 47-92.
- . "Buckingham Palace and the Victoria Memorial, 1901-14." *The Court Historian*, Vol. 11, Issue 1, 2006, pp. 43-58.
- Cannadine, David. "The Context, Performance and Meaning of Ritual: The British Monarchy and the 'Invention of Tradition, c. 1820-1977.'" *The Invention of Tradition*, ed. by Eric Hobsbawm and Terence Ranger, 1983, Cambridge UP, 2012, pp. 101-64.
- Cherry, Bridget. "London's Public Events and Ceremonies: An Overview through Three Centuries." *Architectural History*, Vol. 56, 2013, pp. 1-28.

- Cole, Howard N. *The Story of Aldershot: A History of the Civil and Military Towns*. Southern Books, 1980.
- Greenberg, Allan. "Lutyens's Cenotaph." *Journal of the Society of Architectural Historians*, Vol. 48, No. 1, March, 1989, pp. 5-23.
- Hobsbawm, Eric. "Introduction: Inventing Traditions." *The Invention of Tradition*, 1983, Cambridge UP, 2012, pp. 1-14.
- Hobsbawm, Eric, and Terence Ranger, eds. *The Invention of Tradition*, 1983, Cambridge UP, 2012.
- Sinnema, P. W. "Wyatt's 'Wellington' and the Hyde Park Corner Controversy." *Oxford Art Journal*, Vol. 27, No. 2, 2004, pp. 173-192.
- Smith, Tori. "A grand work of noble conception': the Victorian Memorial and Imperial London." *Imperial Cities: Landscape, Display and Identity*, ed. by Felix Driver and David Gilbert (Manchester UP, 1999) pp. 21-39.
- The Spectator*, "The Statue: Notice to Quit" (14 November 1846) pp. 1093-94. [https://archive.org/details/sim\\_spectator-uk\\_1846-11-14\\_19\\_959/page/1092/mode/2up](https://archive.org/details/sim_spectator-uk_1846-11-14_19_959/page/1092/mode/2up)
- Walsh, Michael J. K., and Andrekos Varnava, eds. *The Great War and the British Empire: Culture and Society*. Routledge, 2017.
- 泉順子「王室とメディア——国民統合の装置としての王室祭儀」、『愛と戦いのイギリス文化史 1951-2010 年』川端康雄・大貫隆史・河野真太郎・佐藤元状・秦邦生編，慶應義塾大学出版会，2011 年，253-67 頁。
- 井野瀬久美恵『大英帝国という経験』，講談社，2017 年。
- 『「ダロウェイ夫人」と帝都——ロンドンの記憶はいかに喚起されたのか？』、『ダロウェイ夫人』窪田憲子編，ミネルヴァ書房，2006 年，48-64 頁。
- 大石和欣「混濁の「帝都」——ヴィクトリア朝時代の建築物のダイナミズム」、『ロンドン——アートとテクノロジー』山口恵里子編，竹林舎，2014 年，31-61 頁。
- 桜井武『ロンドンの美術館——王室コレクションから現代アートまで』，平凡社，2008 年。
- 鈴木博之『建築家たちのヴィクトリア朝——ゴシック復興の世紀』，平凡社，1991 年。
- 『ジェントルマンの文化——建築から見た英国』，日本経済新聞社，1982 年。
- 『ロンドン——地主と都市デザイン』，ちくま新書，1996 年。
- 中村武司「イギリスの二つのパンテオン——ウェストミンスター・アビィとセント・ポール大聖堂」、『空間のイギリス史』川北稔・藤川隆男編，山川出版社，2005 年，150-162 頁。
- 見市雅俊『ロンドン＝炎が生んだ世界都市——大火・ペスト・反カソリック』，講談社，1999 年。
- 林田敏子「忘れられた陸軍」——第二次世界大戦の記憶とイギリス陸軍防空部隊の女性たち』、『関学西洋史論集』第 46 号，関学西洋史研究会，2023 年，1-34 頁。
- BBC「【解説】エリザベス英女王，葬儀はどこでどのように」(2022 年 9 月 13 日，更新 2022 年 9 月 26 日)。<https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-62847201>



## 図版出典

- 図版 1 : BBC 「【解説】 エリザベス英女王, 葬儀はどこでどのように」(2022年9月13日, 更新 2022年9月26日)。  
<https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-62847201>
- 図版 2 : BBC, “Vest worn by Charles I at execution to be shown” (31 January 2020).  
<https://www.bbc.com/news/education-51313498>
- 図版 3 : English Heritage, “The History of the Cenotaph.”  
<https://www.english-heritage.org.uk/members-area/members-magazine/podcast-extras/the-cenotaph-history/>
- 図版 4 : The Royal Park, “Welcome to St. James’s Park.”  
<https://www.royalpark.org.uk/visit/parks/st-jamesss-park/monuments>
- 図版 5 : The Royal Academy of Arts, “Design for Queen Victoria Memorial, the Mall, Westminster, London: plan and aerial perspective looking towards Buckingham Palace, November 1903: Sir Aston Webb PRA (1849-1930).”  
<https://www.royalacademy.org.uk/art-artists/work-of-art/design-for-queen-victoria-memorial-the-mall-westminster-london-plan-and>
- 図版 6 : English Heritage, “History of Wellington Arch”  
<https://www.english-heritage.org.uk/visit/places/wellington-arch/history/>
- 図版 7 : *Punch, or the London Charivari*. “The Proposed Statue of the Iron Duke,” 13 June 1846.  
<https://go.gale.com/ps/navigateToIssue?volume=&loadFormat=page&issueNumber=&userGroupName=meiji&inPS=true&mCode=1SYB&prodId=NCUK&issueDate=118460613>
- 図版 8 : The New York Public Library Digital Collections, “Removal of the Wellington statue, Hyde Park-corner (sketched Jan. 25). Removal of the Wellington statue, Hyde Park-corner (sketched Feb. 27).”  
<https://digitalcollections.nypl.org/items/ffbc8560-bcf1-0131-dd27-58d385a7b928>